

# 酪農の過去から未来を想う

獣医師 高島聖二

今回、江東区のエコに関心のある方と一緒に、房総半島のほぼ中央にある「千葉県酪農のさと」見学会に同行させていただきました。ここは、江戸時代にインドから白牛3頭が初めて輸入され、当時の将軍吉宗公が牛乳を使って乳製品を作ったことから、日本の酪農の始まりとされている場所です。そのようなご縁で酪農の未来を思いながら、一端を述べさせていただきます。

酪農といえば「牛乳」ですが、戦後の食料難に育った自分には一杯の牛乳、一個の卵を手に入れるのがどれだけうれしい出来事であったのでしょうか。今だに忘れることはなく、想いだすと涙ぐんでしまいます。戦後、日本人の身長が伸び体格も大きくなり、欧米並に近づいてきたのに、食料の中でも畜産物の貢献度は大きかったのではないのでしょうか。

## 1、農業と家畜

人類は遊牧民と農耕民族に分類されますが、どちらも家畜は、穀物を生産する為には、土地の開墾や家畜ふん尿の肥料資源として重要であります。農業の発達には不可欠であり、人類は家畜を現在までうまく利用してきました。

農業は、生物（植物・動物）力を借りてエネルギーを生産する活動であり、工業・商業は、エネルギーを消費する活動とも言われます。また農業は物質循環の上に成り立っています。

草地農業は、人間が直接利用できない植物繊維・牧草類を、家畜を介して畜産物に変換・利用する農業になります。作物栽培が困難な土地でも食料生産が可能となり、酪農はまさにその代表格で、大変重要なことがらです。一方、耕地農業では、生産性を向上させるために、化学肥料や殺虫剤などの使用になり、多くの手間と費用が必要とされ、化石エネルギーもより多く消費されることとなります。

## 2、日本での過去の農業・酪農

日本では水田農業のため、家畜の蓄力と堆肥はそれほど必要としませんでした。したがって、西洋の家畜飼養とは異なった展開をたどってきました。家畜の飼養は明治時代の文明開化からとみなされますが、本格的に始まったのは、戦後の復興期に入った1950年頃からです。農業の保護政策で生産力もあがり、選択的拡大政策に移り、有畜農業から規模拡大・多頭羽飼養となり、農業技術の近代化も行われました。1960年には所得倍增計画を契機として高度経済成長期に入り、畜産は飼養農家戸数の減少・頭羽数の増加が顕著となりました。

このことが日本の土地の少ない中での集約化を進め、一層施設と輸入飼料を利用したいわゆる加工型畜産の性格を強め、飼料自給率の低下、ふん尿処理、環境問題の発生へとつながっていったのです。また、日本の主食である米も過剰となり、1970年には減反政策が発表され、戦後農政の大転換期を迎えることになりました。

## 3、畜産・酪農の現状

1980年あたりから国内の乳牛頭数は約200万頭で頭打ちとなり、生産過剰・飽食の時代になってきました。貿易黒字・円高が進み牛肉の輸入も完全自由化となり、畜産物価格も低迷し、安値安定が現在まで続いています。家畜の飼養規模はヨーロッパの平均水準を越え、驚異的に急速な発展を遂げ、日本国内の農業産出額の約3割を畜産が占めるまでになりましたが、今度は生産調整が行われるようになりました。

畜産の規模拡大に飼料生産の拡大が伴ってこなかったことから、家畜のふん尿処理が問題化して、畜産環境に対する確実な対策がなされなければ、畜産経営の存続ができなくなり、さらに後継者不足も加わり、小数精鋭化で高度な経営飼養技術が一層求められるようになりました。経済成長下では、他業種の所得増に追いつくために輸入飼料に頼っても、畜産の規模拡大に向かうしかなかったのです。

ところが、輸入飼料に頼るわが国の畜産の体質が、白日の下にさらけだされたのが2000年の口蹄疫の発生騒動で

す。牛・豚の偶蹄類だけに協力に感染するため、感染の拡大が心配されましたが、奇跡的に発生地だけで終わらすことが出来ました。この病気の発生源では、輸入ワラが最も疑われていますが、国内に豊富にあるワラまで安いからと輸入に頼ってきた結果でもあります。続いて翌年にはBSE（狂牛病）が発生しましたが、これも輸入飼料に肉骨粉の混入が有力視されています。発展途上国での飢餓問題への人道的配慮はさておいても、トウモロコシなどを原料とするバイオ燃料の需要拡大などで、世界的に奪い合いの様相の中、いつまでお金で輸送のために化石燃料を使って、飼料の輸入を続けることができるのでしょうか。地球温暖化の影響が身近に感じられるようになりました。その原因となる温室効果ガスのうち、炭酸ガスの次にメタンが18%程度と取り上げられていますが、そのうち家畜（牛が主）約25%の発生源とされており、新たな畜産公害源とみなされています。

#### 4、未来の展望

1972年に、世界賢人たちの集まりであるローマクラブが発表しました「成長の限界」を、まだ先のように思っていました。早くも身で感じられるようになりました。

石油資源の埋蔵量は、残りあと約20年分との推定は、かなりショックながら現実性を帯びています。悲観論と楽観論に分かれるところでもあります。いずれにしても資源の大量消費、使い捨ての時代は終わりにしなければ、地球の将来はありません。

農業の役割は、①食料の安全保障、②動物・植物の福祉、③国土の環境保全、の三点が世界共通の認識とされています。そのためには、資源を再生可能に有効利用する土地利用型の畜産が重視され、環境保全型畜産に進まざるを得なくなるでしょう。

人間の欲望には、限りがありません。「豊かさ」とは物資の豊富さではなく、「幸福の量」ではかられるよう、私達の心の改造も必要に思われます。

日本には、草を作れる休耕田、田や山も多くあり、適度な陽光と降雨に恵まれた草資源大国でもあるのです。人間は何千年もの間、家畜を利用してきました。家畜を心から愛する限り、人間は英知を集め、種々の困難に立ち向かい、明るい未来を開いてくれることに期待しています